

狂言学習：リハーサルを行いました（6年生）《NO.4》

11月20日（月）に、平之荘神社で、6年生が、狂言発表会のリハーサルを行いました。



【めあて】

- 観客に、自分の声を届ける。
- 私の演技を観てくださいという思いをもって演技をする。
 （思いをもって演じると、観客の心に必ず届きます）

『柿山伏』より

【山口先生より】

「おもしろい。なかなかよく逃げて
 いる。」



【山口先生より】

「よく声が届いています。投げられたタイミングもよかったです。よく稽古をしています。OKです。」

山伏は腰骨を打っているので、片膝のまま畑主に声をかける方がいい。
 「あの横着者」で立ち上がる。

【山口先生より】

先週までは、『柿山伏』の仕上がりを心配していましたが、よく仕上げたと思います。自信をもって！徐々にあなたたちのオリジナリティが生まれてきています。いいです。

「ぼーろんぼろん、ぼーろんぼろん。」は、しっかりと言うように。山伏の目標物は、畑主の頭（こめかみ）をねらって、「ぼーろんぼろん、ぼーろんぼろん。」と言う。だんだんセリフを速めていく。

この場面は、山伏が畑主を背負ったところで終わりになるので、きちっと背負いきる。（中途半端はなし）

背負われる時は、相手の背中にぐっと身を寄せてきちっと止まる。（曖昧にならない）観客は、どこで切り替わるかはしらないので、切り替わるタイミングがわかるようにする。

狂言を演ずる時、なかなか自分と言うものが抜けない。けれども、普段ではない自分が出てくる。

毎年毎年、その年の特徴（あなたたちがもっているものが出てくる）がある。

まだ完成ではない。本番の狂言発表会まで、まだ3日間ある。伸びしろがある。

役として歩く姿は、後見とは違う。観ている人たちの目や耳を一身に集める。こういう経験ができるのを楽しみにしてほしい。あなたたちは、応えられると思う。自信をもって、弾けてほしい。

『猿唄』



最初の音をしっかり強く出しましょう。最初の音を大事にしましょう。

誰一人として力を抜くことをしてはいけません。みんなでそろって声を出しましょう。

『猿唄』の時の扇子の扱い方について

最初は、扇子を腰に差しています。正座をしたタイミング（横の列を合わせて）で扇子を抜いて、自分の前に置きます。横の列は、同じタイミングで座ります。

「はーあっ」のタイミングで、扇子を膝に置き、「……めーでーたーけーれー」のれで、自分の前に置きます。そして、腰に扇子を差して退場します。

《質問タイム》

●「後見」について

後見は、袴の中に手を入れます。大事なのは、袴の中に手を入れた時に、指をそろえることです。

●どうやったら、セリフをゆっくり言えるか

しっかりセリフを届ける感じで話します。狂言のセリフは、選び抜いた言葉になっている。リアルな日常会話ではない。聴いている人に説明をする感じでしっかり言う。

●山伏の「ぼーろんぼろん」の数珠の扱いについて

毎回、数珠をきる。「ぼーろんぼろん」は、ゆったりから徐々に早める。

●畑主の「おのれ、憎いやつ」は、売り言葉に買い言葉の感じで言う。人の柿を盗んで食べておいて・・・と、ムッと腹を立ててけんか腰で言う感じ。しっかり言う。

【11月20日の締めくり】《山口先生より》

23年間続いている平荘小学校の狂言学習です。みんなが生まれる前から続いています。毎年、毎年、違う狂言に仕上がります。

6年生のみなさんにとって、今まで生きてきた12年間、培われてきた関係や特徴がそれぞれの年度で違ってきます。

平荘狂言を指導するに当たって、700年近い伝統文化の動きやセリフを、今生きている私たちが表現しています。

今も、世界で戦争が起こっています。室町時代も生きることに対して、厳しかったかもしれません。医者にかかれば病気は治るといった時代ではなかったかもしれません。

狂言は、その時代時代を生きてきた人が思いを込めて表現してきたから今につながっています。

平荘狂言の指導で大切にしていることは、『子どもたちが創り上げていく狂言』ということです。自分たちで練り上げてきたことが見えてきた時、本当にうれしいです。伝統は止まっていません。人が生まれ、時代が変わり、練り上げてきたものが残っていきます。

伝統の捉え方として、その時々で、きちっと練り上げるということが大事です。先人たちの知恵の上に練り上げるということです。維持し魅力があって存在していることです。

人は、何年間に一回、変わるチャンスがあります。いろんなタイミングがありますが、この狂言を一つのきっかけにして、子どもたちには変わってほしいと願っています。自分の思いがないと相手には伝わりません。自信をもって舞台に臨んでほしいと思います。

